

関西大学 120 周年記念行事・シンポジウム

【基調講演】

「日本のなかの大阪文化遺産」

高橋 隆博（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター・センター長／関西大学文学部教授）



高橋 隆博センター長

皆さんこんにちは、高橋でございます。（拍手）東北地方の山形県生まれで、山形育ちの私が、なにわ・大阪をお話することに、皆さん方は違和感をお持ちになるでしょうし、私自身も不思議なめぐり合わせを感じております。ただ、大阪に住まいをせずい分と年月を重ねておりますので、大阪のことを、大阪の文化を理解しようという気概だけは持っているつもりでございます。恐縮でございますが、少しの間、東北弁におつき合いいただきたいと存じます。それにいたしましても、私どものこのたびの催しに、こんなに大勢の方がお見えになるとは思いもしませんで、驚いているところです。ありがとうございます。この会場の定員は1,000名ですが、申込みの段階ですでに超過いたしまして、300人ほどの方がたにお断りいたしております。大変申し訳ないことだと、お詫び申しあげねばなりません。

時間がそれほどございませんので、本日のテーマ「日本のなかの大阪文化遺産」についてお話を進め

てまいります。ところで、文化遺産について研究することを文化遺産学と命名しましたが、これは私どもがはじめて提唱いたしました名辞です。特許をとっているわけではありませんが、ゆめ勝手にお使いにならないように、ご使用の際は、私どもの了解を得ていただきたいと存じます（笑い）。じつは文部科学省が進めております私立大学高度化推進事業のオープン・リサーチ・センター整備事業（研究補助事業）に採択された「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター」（平成17年度～平成22年度）の申請文書の中で文化遺産学という名辞をつかったのが最初です。

昨今、文化遺産という言葉がさかんに使われています。周知のことですが、これは1972年のユネスコ（国際連合教育科学文化機関）第17回総会において、世界に貴重な自然遺産であるとか、文化遺産であるとかを護っていこうとする条約、すなわち「世界遺産条約」（世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約）が採択されて以後のことです。ちなみに世界遺産に登録されている日本の文化遺産は、「法隆寺地域の仏教建造物群」「姫路城」（1993年）を最初とし、清水寺や平等院、上賀茂神社など京都の14の寺社からなる「古都京都の文化財」（1994年）、「白川郷と五箇山の合掌造り集落」（1995年）、「原爆ドーム」「厳島神社」（1996年）、東大寺や春日大社など6寺社と平城宮址、春日山原始林からなる「古都奈良の文化財」（1998年）、栃木県の日光東照宮や輪王寺などを中心とする「日光の社寺」（1999年）、「琉球王国のグスクおよび関連遺跡群」（2000年）、高野山と熊野三山（熊野本宮大社や熊野速玉

大社、那智大社)、吉野金峰山などを含む広い地域におよぶ「紀伊山地の霊場と参詣道」(2004年)などです。

私たちがどうして、「なにわ・大阪文化遺産学研究センター」を構想したのかといいますと、関西大学は吹田市にございます。なにわの地に、大阪にある大学です。なにわ・大阪の水に、土に、なによりもなにわ・大阪の人びとに育てていただいた大学です。関西大学を縦軸に見ても横軸に見ても、「なにわ・大阪」とは不可分の関係にあります。しかし、虚心坦懐に振り返りますとき、これまで120年の長き歴史を刻んできた関西大学が、はたして「なにわ・大阪」を対象にした研究を積極的に行ってきたのか、「なにわ・大阪」に責任を果たしてきたのかといいますと、必ずしも万全であったとは言い切れません。これまで120年も育てていただいた「なにわ・大阪」に、何がご恩返しになるのかと考えましたとき、「なにわ・大阪の文化遺産」そのものを研究の対象にすべきであろうと結論するにいたったわけです。そしてその成果を、社会に還元し、さらには次の世代に繋いでいこう、そういう役割を果たそうということで「なにわ・大阪文化遺産学研究センター」を立ち上げたわけでございます。

そこで先ず、足元の文化遺産を、つまり大阪の文化遺産についてあれこれと考える前に、関西大学の文化遺産を振り返らなければいけません。そうしますと、なによりも先ず末永雅雄先生(名誉教授)に指を屈しましょう。いうまでもなく先生は、昭和63年度の文化勲章受賞者で、押しも押されもしない日本考古学界の重鎮でございました。歴史学者の文化勲章受賞者としましては、東京大学の坂本太郎先生に次いで2人目の受賞でした。「壁画のカビ」問題で連日のように報道されている「高松塚壁画古墳」といえば、網干善教先生(名誉教授)ということになりますが、「壁画発見」で日本中の話題をさらったあの発掘調査(1972年)は、末永先生の指導のもとに行われたものでした。もちろん末永先生と網干先生とは、太い絆で結ばれた恩師と弟子の間柄です。網干先生もまた日本考古学界に大変大きな功績を残された先生で、関西大学が創立100周年を記念して行ったインドの祇園精舎址の発掘成果は、まさに世界考古学界に打ち立てた金字塔です。口惜しいことに、網干先生は今年の7月29日にお亡くなりにな

りました。考古学界にとっても大きな損失ですが、関西大学にとっても悔やみきれない痛手です。

いささか年月を経過しておりますので、忘れかけられておりますが、関西大学の誇る約1万6,000点もの考古資料は、もとは毎日新聞社の本山彦一元社主が蒐集していましたが、これが末永雅雄先生のご尽力によって関西大学に入ったわけです。ですから、末永先生のお力がなければ、関西大学の考古資料、すなわち博物館資料は存在しなかったこととなります。この一事だけでも、末永先生は関西大学に大変大きな功績を果たされたこととなります。じつは私も末永先生にあこがれて関西大学に入学いたしました端くれで、大きな学恩にあずかり、かわいがってもいただきました。礼儀作法にとりわけ厳しい先生でございましたけれども、実は優しい一面もございました。その一例をいささか紹介させていただきます。

高松塚古墳発掘とその後に関することですが、未曾有の発見となった極彩色壁画の今後の保存措置については、先生は国にゆだねるべきとの決断をされました。まさに無私の大英断でした。その時のことが末永雅雄編『壁画古墳 高松塚』の序文に末永先生が述べておられますので紹介しておきます。

「学生の調査日誌を見ると、発掘の努力を重ね、これを愛し、調査を続けたが、次第に自分たちから遠ざかり行く悲しみを書いたものがあつた。それほどまでに高松塚古墳を愛する感情を持って、愛情を持って調査に努力していたかと驚いた。今これを書きながら、なお胸が詰まる。しかし、この偉大な資料の個人的財産とは異なることを考えれば、すべてを挙げて国家処理に移し、保存と調査研究の万全を期して次代の日本国民に伝えるべきである」

感動的な文章です。末永先生は、学生一人一人の顔を思い浮かべながら、調査日誌に目を通しておられたことがわかります。おそらく末永先生は、この文章をお書きになるとき涙していたに違いない、私はそう確信しております。学生に対するこうした眼差しといいますか、愛情といいますか、人間教育といいますか、これが関西大学の学風であります。これこそある意味での大きな文化遺産なのです。もちろん学問的業績の蓄積も文化遺産ですけれども、こうしたことはもっと大切なことです。

それから、有坂隆道先生（名誉教授）を挙げなければなりません。先生は日本洋学史の泰斗でしたが、平成16年6月18日、鬼籍に入られました。痛恨のきわみです。先ほど偉そうにも「なにわ・大阪文化遺産学研究所」は、私たちが提唱したものと声高に申しましたが、じつは昭和35年に有坂先生はすでに「大阪文化研究所」を立ち上げておられるのです。それだけではありません。研究誌『上方文化』を発行しているのです。残念なことに、資金のことなどもあってこの画期的な『上方文化』は、続刊をのぞむ声しきりの中、5号で中断のやむなきにいたりました。有坂先生はほとんど私費を投入して発刊していたようで、資金面のことなどからの中断であったとお聞きしております。

有坂先生は、「大阪文化研究所」設立について、『上方文化』にこのように述べておられます。少し長くなりますがこれも紹介させていただきます。

「今、私たちを取り巻く日本の現代文化の状況を振り返ってみると、そこには我々が真剣に再考しなければならない問題がはっきりあらわれているように思われる。その中でも、最も深刻な問題は、我々が自己の存在理由につながるものとして自覚できるような自分たちの文化を、果たして持っているだろうかという強い疑問を否定することができない。現在いろいろな媒体の発達のおかげで、私たちは有形・無形の文化的商品の洪水の中に置かれている。しかし、それらは多く雑多な、細切れにされた文化の破片であり、私たちの生活の背骨をつくり、それに肉づけしていく目的に奉仕するような性質のものとは思われない。そういった現代的な文化の氾濫は、主体を持った人間の喪失、郷土や祖国と結びついた市民精神の喪失と表裏の関係を持っているのではないだろうか。私たちが大阪文化研究所を設立し、機関誌『上方文化』を刊行する基本的な目的は、まず、自分たちの文化を育てるべき土壌を明らかにし、かつて日本民族文化の先進地域であった上方に検証のフィールドを求め、ほかならぬ我々の物の見方、感じ方、行動の仕方のうちに伝わり、しみ通っている重要な文化的諸要因を新たに発掘することである」

これもまた、先ほどの末永先生に比肩するほどの格

調高い文章です。ですから私たちの「なにわ・大阪文化遺産学研究所」は、有坂先生がすでに40数年前に興された「大阪文化研究所」の系譜にあるということになりましょう。

もうお一人、藺田香融先生をあげねばなりません。先生は日本古代史学界の牽引者でございます。もちろん、先生は和歌山市にご健在で、ご活躍中です。和歌山市には、万葉の歌人山部赤人が「和歌の浦に 潮満ちくれば瀉をなみ 葦辺をさして 鶴鳴きわたる」と詠んだ風光明媚な和歌浦があります。そのもっとも和歌浦らしいところといえば、妹背山や玉津島、不老橋あたりで、不老橋から東の名草山をのぞむ静かな入り江は、とりわけ美しい景観をなしているところです。ところが和歌山県は、あろうことか不老橋の東側の海中に、80メートルものコンクリートの車道橋「新不老橋」建設を計画しました。着工したのは1989年5月23日のことです。

藺田香融先生は、和歌浦の景観を保存するための住民訴訟を和歌山地方裁判所に起こしたわけです。訴訟の要諦は何かといいますと、「一般市民は、歴史的景観を享受する権利がある」ということに尽きます。歴史的景観を市民が享受する権利あるという訴えは、裁判史上初めてのことなんです。残念ながらこの訴訟は原告団の敗訴になりました。その後、文化庁は、まったく久しぶりに文化財保護法を改正いたしまして、景観法をつくりました。ただし、文化庁は歴史的景観のかわりに文化的景観という文言にしているのです。敗訴になりましたけれども、これ以後、「歴史的景観」と言葉がさかんに叫ばれるようになり、文化財保護法の改正をもうながしたという意味では、藺田先生の投じた一石は、きわめて大きいものがあったといわざるをえません。

その頃、つまり「和歌の浦訴訟」のときには、藺田先生はもちろん現職の関西大学の教授で、原告団団長でございました。おうかがいしますと、夜となく昼となく、相当のいやがらせがたびたびであったとお聞きしております。しかし、決してそれに屈するような先生ではありません。お体はどちらかといいますと小柄な方で、いつもにこやかな表情をされているのですが、まことに豪胆で、慧眼の歴史家です。

時間の関係もありますので、わずかお三人の先生だけの紹介に留めますが、こうした先生方の遺され

たことが関西大学の文化遺産であって、その精神こそが関西大学のDNAといえましょう。私たちの「なにわ・大阪文化遺産学研究センター」は、こうした先生方のDNAを受け継いで行こうと肝に銘じているところがございます。私たちは、こうした先生方が築きあげてこられた文化遺産を大切に、将来に受け継いで行きたいと念じております。

これまでご紹介しましたのは、関西大学の「文化遺産としての人」に焦点をあててお話をいただきましたけれど、次に調査研究の対象とすべき関西大学の「文化遺産としてのもの」に移したいと存じます。

さきほどの末永雅雄先生のところで触れました「本山考古コレクション」（重要文化財12点をふくむ1万6,000点）をあげねばなりません。その中には藤井寺市国府遺跡出土の12点の重要文化財を含んでおります。これは特筆すべきことで、全国の大学博物館の中であってまことに希有なことであります。

つぎに泊園文庫があります。漢学者の藤澤南岳先生が、文政8年に大坂淡路町につくりました漢学塾泊園書院の漢籍類を内容としております。この漢籍類が、昭和26年に関西大学におさまることになり、これを契機として関西大学東西学術研究所が設置されたわけです。

そして、図書館に架蔵される鬼洞文庫があります。この中には、大阪関係の引札やかかわら版などが入っており、これらはまことに貴重な資料です。

さらには、東京教育大学教授から関西大学に迎えられた津田秀夫先生が蒐集されましたおびただしい量の近世古文書があります。これは関西大学文学部の古文書室に収蔵されており、現在は目録の作成、解読作業など、整理を進めているところです。

また、図書館に収蔵されている「上方役者絵」の版画類もきわめて貴重です。「上方役者絵」については、本日シンポジウムのパネラーの1人としてご出席のイギリス・ロンドンSOAS大学教授ガーストル先生がご専門としている分野でもあります。浮世絵といいますと鈴木春信や葛飾北斎、安藤広重といった江戸の浮世絵師たち、版画作品を思い浮かべますけれども、大坂にも大変すぐれた浮世絵師がいて、浮世絵を世に出していたことをすでに大阪の人びとさえも忘れ去っているのが現状で、まことに寂しいかぎりです。幸いにして関西大学

図書館は「上方浮世絵」を所蔵しております。「なにわ・大阪文化遺産学研究センター」では、「上方浮世絵」のうちから役者絵を特集した出版物『上方役者絵』を『なにわ・大阪文化遺産学叢書Ⅰ』として本年の3月に刊行いたしましたところです。斯界からは高い評価をいただいております。以上紹介しましたが、かいつまんだところの関西大学が所有する「文化遺産としてのもの」です。

与えられております持ち時間が少なくなってまいりました。少し先を急がねばなりません

そこで、はじめに掲げました「文化遺産学とは何か」という話に戻りたいと存じます。さきほどから文化遺産学は私たちがつくった新しい名辞だと申しましたように、その学問的体系などは構築されているわけではありません。文化遺産学の話の前に、少し文化についての話をいたします。学生たちに「文化とはなんだろう」「何が大阪の文化だろう」と聞きますと、決まって「タコ焼き」「道頓堀の蟹や河豚などの飾り物」、それに「阪神タイガース」「アメリカ村」と、たいがいこんな答えが返ってきます。コンパなんかで梅田あたりに出かけましたら、露天神つまりお初天神ですね、あのあたりに行くと、「ここが近松門左衛門の世話物『曾根崎心中』の舞台となったところだよ」、「あれは大坂内本町の醤油屋平野屋の手代徳兵衛と北の新地の天満屋の遊女お初とが曾根崎天神の森で情死した事件をもとに近松が脚色した物語でね、あのあたりを蜷川が流れていたんだよ」といっても、興味があるのか、ないのか、ただ聞いているだけで、彼らには近松の作品が大阪の文化に結びついていないのかもしれない。あるいは漠としすぎているのかもしれない。これは、大学も大いに反省しなければならないことで、大学だけでなく、小学校から中学校、高等学校の児童・生徒たちに大阪の歴史や文化をしっかりと教えてこなかったことにも関連しているのかもしれない。自分たちの住んでいる地域の歴史や文化を教えないのは、まったくの手抜きです。

さて「文化とは何か」です。大変難しいテーマですが、すでにアメリカのイェール大学教授ラルフ・リントンという学者がじつに明解に定義しております。彼の著書『文化人類学入門』（東京創元社）を私なりにまとめてみますとこのようになります。「文化は、2人以上複数の人間が共有する生活様式」

であると。ですから、山奥で1人だけで住んでいて、特殊な技術で生活していたとしても、あるいはいささか変わったものを残したとしても、それを文化とはいわない。なぜなら彼以外の人があることを知らないし、その技術が彼以外に共有されていないからです。

文化には、ありとあらゆるものが内包されています。まずは言葉がそうです。さまざまな生活器具を作り出す技術がそうです。住宅などの建物があり、生活様式があります。寺院・神社があり、その法会・祭礼があり、芸能があり、学芸があり、地域の組織があり、さらには食べ物とその加工技術・保存の技術があります。これらすべてが文化遺産学の対象となります。まさにあらゆるものが文化なのです。

ですから、まずは「何が文化遺産なのか」を模索しようとする柔軟な発想こそが肝要なのです。まずはそのことが文化遺産学の第一歩ということになります。次に、その研究の方途を構想すること、つまりどのように調査・研究を進めていくのかということです。これが文化遺産学の2番目の課題になります。3つ目は、そうやって調査・研究した成果は、決して大学内だけに留め置いてはいけません。地域の人びとにこれをお返し申し上げ、まずはその地域の方がたに認識していただき、理解を深めてもらうことです。いわゆる社会還元です。ですから社会に還元することが文化遺産学の目標です。以上のことが私たちが考えました「なにわ・大阪文化遺産学研究」の構想です。

いちがいに「なにわ・大阪」といっても広範囲におよびます。そして、それぞれの地域には、それぞれの歴史性と文化力が堆積しております。それがまたその地域の文化的な特質ともなっておりますし、それが地域性です。私たちはそれぞれの地域の文化的特質を深く知らなければなりません。その文化的特質こそ、まずは地域の住民の方がたが共有し、さらにはそれを将来に継承していただくような方策を提示する、これが社会貢献、地域還元ということになるだろうと思います。文化遺産というのは、決して過去の遺産などではありません。将来を展望するにきわめて有効な文化資源だと位置付けなければなりません。私どもが考えております文化遺産学というのはそういうこととございます。

しかしさきほども申しましたように、大阪といっても茫洋としており、大変広いです。そこで、何かを核にしなければ文化遺産学の研究は前に進まないわけですので、私たちは幾つかの研究のプロジェクトをつくりました。いわゆる研究の組織のことで、これを四つの班(①～④)にいたしました。

①は「祭礼遺産研究プロジェクト」です。寺院の法会や神社の祭礼の研究ということになります。天神祭とか四天王寺の聖霊会(国指定の重要民俗文化財)、あるいはたとえば大阪の夏祭りなどを対象にするグループです。その②は「生活文化遺産研究プロジェクト」です。生活器具や生活様式、伝統的な技術やなにわ野菜などがその範疇に入り、たとえば東大阪の鋳物技術や天王寺蕪や勝間南瓜、吹田慈姑などの野菜もその対象となります。その③は「学芸遺産研究プロジェクト」です。ご存知のように、たとえば酒造業を営む傍ら書画骨董の蒐集家、そして文人画家として知られる木村兼葭堂を例にあげるまでもなく、大阪には、わけても江戸時代に展開した学問の蓄積がありますし、浄瑠璃をはじめとしますさまざまな芸能がありますので、それらが対象となります。そして④が「歴史資料遺産研究プロジェクト」です。古文書や古絵図・古地図、拓本、あるいは絵馬などもその対象となります。

こうしたものが主に集積されている場所といえますと、やはり大きな街道の結節点であり、信仰の場であり、また地域の中核となっている寺院や神社ですね、四天王寺とか、大阪天満宮とかに代表されるでしょう。天神祭にいたしましても、大事な神事、つまり銚流しなどの船御渡と陸御渡があり、儀式があり、供え物があり、飾り物があり、町の住民の参加があります。祭りや地域住民の相関関係もそこに見えるわけです。

それでは、当センターのこれまで1年間の活動状況について簡単に触れさせていただきますと、と申しましても実質的には今年の6月からのことですが、これまで二回のフォーラムを行い、それぞれに大きな成果を得ましたが、とりわけ私たちが感銘を受けたのは、第2回の文化遺産学フォーラム「大阪と沖縄の文化遺産」のときに、琉球大学の高良倉吉先生がお話しなされたことです。第二次世界大戦で沖縄は連合国軍に完膚なきまで武力で掃討されたわけですが、「この沖縄の戦争によって、沖縄の文化

遺産の何が失われたかがわからない」という発言です。これほど衝撃的なことはありません。沖縄の人びとにとって、「何がなくなったのかわからない」ということほど悲劇的なことはありません。たとえば技術というものは、一端途絶えてしまうとなかなか復興できませんが、技術を伝える人びとが生存してさえおれば復活できるのですが、建築物や器物は、ひとたび失われますと、再びもとに戻りません。高良教授は、「だからこそオーラル・ヒストリーということが大事になってきます」と、強く提言しています。オーラル・ヒストリー、伝承、言い伝えですね。「なにわ・大阪」に関するさまざまな伝承もまた「なにわ・大阪文化遺産学」の大切な研究テーマということになります。

なお、フォーラムに関して付け加えますと、今年の10月、芦屋美術博物館と提携して「大坂画壇」をテーマにしたフォーラムを行っております。

また私たちは、地域連携ということを考えております。昨年の秋に、大阪の藤井寺市にあります道明寺天満宮の御協力をいただき、同宮を会場に最初の「地域連携企画」を講演会と展覧会の2部構成で実現いたしました。関西大学博物館が所蔵しております本山考古資料の中に河内国府遺跡から発掘された遺物が相当数ございます。この国府遺跡（藤井寺市）は、大和川左岸にありまして、大正年間に発掘調査が行われた遺跡で、いくつかの人骨も出土したこともあって、当時は連日のように新聞紙上にぎわしております。かなり以前の発掘調査ですので、藤井寺市民の方がた、遺跡の近くにお住まいの方がたは別としまして、あまりご存知ないのが実情です。藤井寺市内で発掘されたものは、まずは藤井寺市民が認識しなければいけないというのは私たちの考えでありますので、それならばこちら側から出向いて、国府遺跡から発掘された遺物を会場に運んで展示し、地域の人びとに見ていただくということで、この「地域連携」を企画いたしましたわけですね。あわせて当センターの美術史の先生が「渡唐天神画像」について、考古学専門の先生が「河内国府遺跡」について講演会を催したところ、約300人ほどの地域の方がたにお集まりいただきました。感謝いたしております。同時にこの「地域連携企画」にささかの自信めいたものが仄見えきたことも事実でした。

そこで、第2回目の「地域連携企画」を、本日この会場に八尾市文化財行政のご担当者が来ておられますけれども、八尾市と連携して行いました。JR八尾駅の近くに、江戸時代に安中新田の会所になった居宅がございます。大きなお屋敷と建物です。現在これを所有されておられる植田家が、そっくりそのまま八尾市に寄贈されました。建物は登録文化財となっております。しかも、掛け軸類や書籍類、河内木綿、民俗資料などもすべて含めての寄贈です。植田家のまことに高邁なお心に、頭を垂れるほかはありません。

八尾市と関西大学とは協定を結んでいることもあって、文化財についての調査を当センターが行うこととなり、これまで進めてきたところです。そこで、植田家の文化財のおおよそについて、まずはこの地域の人たちに安中新田の歴史や植田家のことなどを知ってもらおうということで、八尾市と連携しながら実現したのが第2回目の「地域連携企画」でした。地域の約60人ほどの方がたが参加していただきました。

私ども「なにわ・大阪文化遺産学研究センター」では、フォーラム、地域連携、そしてワーク・ショップを活動の柱としており、今年の5月、天王寺楽所雅亮会の全面的なご協力をいただきまして、「なにわ・大阪文化遺産学研究センター」の建物内で行いました。一般市民の方がたにご案内しましたところ、じつに多くの申し込みがあり、申し訳ないことですが、お断りするのに苦慮したほどです。当初はセンターの前庭で行うべく、野外に舞台を設けていたのですが、あいにくの小雨模様となり、やむなく会場をセンター内に移したのですが、会場（定員約80名）は立錫の余地がないほどの盛況となりました。

当センターの活動の柱に、これまで紹介いたしましたフォーラム、地域連携、ワーク・ショップ、それにレクチャー（講演）があります。その第1回目には、「なにわ・大阪の神社」を取り上げ、第2回目には「京野菜VSなにわ伝統野菜」というタイトルで行いましたところ、野菜を栽培しておられる人、料亭の主人、野菜を現材料とした菓子や焼酎の製造業者など、さまざまな方がたに参加していただき、大変な盛況ぶりでした。当センターでも、二坪ほどの小さい野菜畑をつくっております、田辺大根や

天王寺蕪、玉造黒門越瓜などを栽培いたしております。

当センターの研究成果物としては、さきほど少し紹介しました『文化遺産学叢書』を順次刊行していく予定でありますし、年間の活動報告としましては、年度末には『年報』を発行するとともに、『難波潟』、そしてレクチャーの内容を活字化した冊子『Occasional paper (オケーショナル・ペーパー)』、それに『NOCHSメール』を発行しております。NOCHSとは、「なにわ・大阪文化遺産学研究」の英文頭文字をあてた名称です。

いつも反省はしているんですが、本日も前半に時間を取りすぎてしまったようで、いよいよ持ち時間がなくなってしまいました。最後に一つだけ申しておきたいことがあります。それは文化遺産を護って行こうとするとき、そして将来につないで行こうと考えるときの要諦とは、一つに「地域」、二つに「人」、三つ目に「技術」ということになりましょう。そして、この三つに通底していなければならないことは「きずな」です。地域の人びとによる「きずな」が何よりも大事なことです。地域の外側の人びとがその地域に向けられる眼差しも重要なことです。つまり「内のきずな」と「外のきずな」の結びつきです。たとえば、現在の道頓堀境界はかつての面影はありません。昔は歌舞伎や浄瑠璃を観劇し、非日常的な料理を味わう「規矩ある大人の街」であったが、今や「奔放な若者の町」となっています。文化は、その時代、世相を色濃く反映していくものですから、その良し悪しを、あるいは優劣を判定したところで、ほとんど意味をなしません。しかし将来、道頓堀川の河畔を、あるいは町並みを、そして景観をも取り込んだ「道頓堀の文化景観」を展望するのであれば、道頓堀境界の人びとだけの発想と努力だけではなく、道頓堀の外側からの眼差しが大切なことです。消極的あるいは間接的なことかもしれないかもしれませんが、その街を育てていこうとする姿勢が必要になってきます。これが「外のきずな」です。大変難しいことですが、一人一人に突きつけられた課題であるだろうと思います。

ちょっとどころか、すっかりと雑駁な話になってしまいました。申し訳ございません。私は前座でございますので、これからの第2部パネルディスカッションの方がはるかに興味ぶかい内容になるはずで

すので、これで私の拙い話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。(拍手)



パネルディスカッションの様子